kaminorippo.org

神の律法：序章

神の律法について書く名誉

最も高貴な任務

神の律法について書くことは、単純な人間が手の届く範囲で最も高貴な任務であるかもしれません。神の律法は、ほとんどの人が認識するような単なる神の戒めの集まりではなく、彼の二つの属性—愛と正義—の表現です。

神の律法は、人間の文脈と現実の中で彼の要求を明らかにし、罪が世界に入る前に持っていた状態に戻りたいと願う者の回復を目指しています。

律法の至高の目標

教会で教えられてきたこととは反対に、すべての戒めは文字通りで、反抗的な魂の救いという至高の目標を達成するために揺るぎません。誰も服従を強制されませんが、服従する者だけが創造者と回復し和解するのです。

したがって、この律法について書くことは、神聖な一端を共有することであり、謙虚さと敬意を要求する稀な特権です。

神の律法に関する包括的な研究

これらの研究の目的

神の神聖で永遠の律法は、時の初めから忠実に守られてきました。イエス、その家族、友人、使徒、弟子たちはみな神の戒めに従いました。

これらの研究では、神の律法について知るべき真に重要なすべてのことを取り上げ、望む者が地上での生活に必要な変化を起こし、神自身が定めた指針に完全に一致できるようにします。

忠実な者への安堵と喜び

人間は神に従うために創造されました。勇気があり、父によってイエスに赦しと救いのために送られたいと真に願う者は、これらの研究を安堵と喜びをもって受け取るでしょう:

- 安堵:神の律法と救いについての二千年もの誤った教えの後、神はこの資料の作成を我々に委ねるにふさわしいと見なしました。これは、この主題に関するほぼすべての既存の教えに反するものであると我々は認識しています。
- 喜び:創造者の律法と調和することの恩恵は、単なる被造物が表現できるものを超えています—精神的、感情的、肉体的な恩恵です。

律法に正当化は必要ない

律法の神聖な起源

これらの研究は、主に議論や教義的弁護に焦点を当てていません。なぜなら、神の律法は正しく理解されれば、その神聖な起源ゆえに正当化を必要としないからです。

決して疑問視されるべきではなかったものについて果てしない議論に取り組むことは、神自身に対する冒涜です。

創造者に挑む被造物

有限な被造物—粘土のかけら（イザヤ書64:8）—が、いつでも無価値な破片の中に捨てられる可能性のある創造者の規則に挑む行為そのものが、その被造物に深く不安なものを明らかにします。

これは被造物自身の利益のために緊急に正されなければならない態度です。

メシアニック・ユダヤ教から現代キリスト教へ

父の律法とイエスの模範

私たちは、父の律法がイエスに従うと主張するすべての者によって単純に守られるべきであると肯定します—イエス自身とその使徒たちがそうしたように—が、キリスト教内で彼の律法に関して大きな損害がもたらされたことを認めます。

そのような損害は、キリストの昇天以来ほぼ二千年にわたって何が起こったのかを説明する必要性を生み出しました。

律法に関する信仰の変化

多くの人は、メシアニック・ユダヤ教—旧約聖書の神の律法に忠実で、父が遣わしたイスラエルのメシアとしてイエスを受け入れたユダヤ人—から現代キリスト教への移行がどのように起こったのかを理解したいと思っています。現代キリスト教では、律法を守ろうと努力することが「キリストを拒絶すること」と同等であるという信念が主流であり、当然ながらそれは非難と結びつけられています。

律法の認識の変化

祝福から拒絶へ

かつて祝福された者によって昼夜を問わず瞑想されるべきものと見なされていた律法（詩篇1:2）は、実践上、その服従が火の湖へと導く一連の規則と見なされるようになりました。

これらすべては、旧約聖書や四つの福音書に記録されたイエスの言葉に一片の支持もないまま起こりました。

従われていない戒めの対処

このシリーズでは、世界中の教会でほぼ例外なく最も従われていない神の戒めについても詳しく取り上げます。例えば、割礼、安息日、食事法、髪と髭の規則、そしてツィツィトです。

私たちは、メシアニック・ユダヤ教から距離を置いた新しい宗教でこれらの明確な神の戒めがどのようにして守られなくなったのかだけでなく、聖書の指示に従って—イエスの時代から人間の伝統を神の聖なる、純粋で永遠の律法に取り入れてきたラビ的ユダヤ教に従わず—それらがどのように適切に守られるべきかを説明します。